

国際仏教学大学院大学研究紀要

第 25 号（令和 3 年）

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XXV, 2021

『一切経音義』の独自項目から見た  
『新撰字鏡』の依拠本

李 乃 琦



## 『一切経音義』の独自項目から見た 『新撰字鏡』の依拠本

李 乃琦

### 1 はじめに

天治本新撰字鏡（898～901年成立、1124年書写。以下、「新撰字鏡」と略す）は、平安時代の僧侶である昌住によって編纂された現存最古の漢和辞書である。新撰字鏡には、その序文に一切経音義（玄応撰一切経音義、以下「一切経音義」と略す）使用の利便性の改善を目指すという編纂目的が明記されている。一切経音義は仏経の順に収録されているので、仏経を熟知している僧侶以外、利用するのが不便なのであった。そのため、昌住は一切経音義を部首順に改編し、三卷本が完成した。その後、玉篇と切韻を加え、現存する天治本十二卷本の形態になった。

一切経音義自体は、いくつかの系統に分けられることが明らかになっているが、その系統間の相違は新撰字鏡の序文・跋文に記されていない。そのため、昌住が新撰字鏡を編纂した際に利用了一切経音義が、特定の一種類だと推測するのは容易である。新撰字鏡には「法隆寺一切経」の方印があり、また奥書に「法隆寺一切経」の記述が見られる。よって、新撰字鏡が法隆寺に伝存していたことは確実である。昌住は伝未詳であるが、南都古宗の僧であると思われる。一方、一切経音義は、日本に多数の写本が現存し、その中で大治本は大治三年（1128年）に同じく法隆寺で書写された。このことから、新撰字鏡が大治本に近似した系統の一切経音義を利用したことは十分に考えられる。

筆者は、大治本に記載がなく、新撰字鏡と一切経音義他本にある内容を複数例見出した。本論では、それらの例が生じた要因を解明するために、さまざまな可能性を検討し、考察する。

## 2 先行研究

新撰字鏡は、引用部分についてはその出典を明記していないが、貞苺伊徳氏一連の研究では、それらの引用部分についての出典を一切経音義・玉篇・切韻・出所不詳の四種に分類している。他にも、爾雅釈訓・文選・遊仙窟・日本霊異記からの引用を明記している。本論文で例として挙げる項目は、いずれも一切経音義を利用している例と考え、貞苺氏が指摘した「一切経音義からの引用部分」と一致するか否かを明記する。

池田（1982）では、新撰字鏡の「木」部と「金」部を分析し、新撰字鏡における一切経音義利用の方法を明らかにした。中でも、最初の段階の新撰字鏡は、一切経音義全体を再編したものではなく、特定の巻を重点的に引用しているという指摘は重要である。池田（1984）では、新撰字鏡一切経音義引用部分の字順の分析に基づき、新撰字鏡が利用した一切経音義のうち、巻第十二、十三、十五が増訂本であることを指摘した。さらに、一切経音義引用部分の字順の原則から、一切経音義の25巻をいくつかのグループに分けて利用したことを明らかにした。この論文では、主に字順に注目して、新撰字鏡と一切経音義の利用関係を明らかにした。しかしながら、辞書内容の視点からみて、掲出語と注文に対して詳しく検討する必要がある。

また、拙論（2017）では、同じ平安時代に成立した図書寮本類聚名義抄と一切経音義諸本との比較を行い、図書寮本類聚名義抄の編纂時に利用した一切経音義は大治本系統に近いということを明らかにした。また、「図書寮本と法隆寺旧蔵の大治本が同じく法相宗の僧侶によって成立し

たものであるのに対して、大治本系統に属する金剛寺蔵本と七寺蔵本は真言宗の寺院で書写された。そのため、図書寮本編纂時に、書籍の利用伝播が宗派にかかわらず、学問的な交流の実態が存する」と指摘した。これを受けて、本論では新撰字鏡と一切経音義諸本の独自項目との照合を通して、利用された一切経音義の系統を検討する。

### 3 「一切経音義全文データベース」

筆者は、「一切経音義全文データベース」を構築し、既に一切経音義日本古写本について、高麗本系統：高麗本と七寺本 A（巻第一～巻第十、巻第十三、巻第十四）、大治本系統：金剛寺本、大治本と七寺本 B（巻第十二、巻第十五〔東京大学本〕、巻第十六～巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五）、石山寺本系統：西方寺本、広島大学本、天理図書館本、京都大学本の三つの系統に分けられることを検証した<sup>1</sup>。諸本系統の分類に際しては、主に、異同のある注文を検討した上で行った。

利用している諸本は次のとおりである。

- (1) 高麗本：（全 25 巻。『高麗大藏經』、東国大学校、1976 年。『高麗大藏經初刻本輯刊』、西南師範大学出版社・人民出版社、2012 年）
- (2) 金剛寺本：金剛寺蔵本（鎌倉時代書写。巻第一～四、六、七、九～二十一、二十四、二十五の 21 巻が現存する。）
- (3) 七寺本：七寺蔵本（平安時代書写。巻第一～十、十二～十四、十六～十八、二十一、二十三～二十五の 20 巻が現存している。また、巻第十五は東京大学史料編纂所に所蔵されているので、合わせて 21 巻現存する。）
- (4) 大治本：宮内庁書陵部蔵本（平安時代書写。巻第一、二、九～二十

<sup>1</sup> 李乃琦（2017）「図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切経音義』の利用」日本語学会口頭発表、2017 年 5 月 13 日、関西大学

五の19巻が現存する。）

(5) 西方寺本：西方寺蔵本（三分の二が平安時代、三分の一が鎌倉時代の書写である。巻第一、三～六、九、十三、二十一、二十五の9巻が現存する。）

(6) 広島大学本：石山寺蔵本（平安時代書写。巻第二～五、十の5巻が現存している。）

(7) 天理図書館本：天理図書館蔵本（巻第九、第十八が現存する。巻第九が院政期の写本、石山寺本の一本である。巻第十八が鎌倉時代の写本である。）

(8) 京都大学本：石山寺蔵本（巻第六、七が現存する。石山寺本の一部である。）

(9) 東京大学本：七寺本蔵本（巻第十五のみ現存する。七寺一切経の一部分である。）

#### 4 独自項目と独自注文

##### 4.1 独自項目の定義

本稿では、「独自項目」という語を使用している。一切経音義の同一の巻を考察した際、単一の系統にしか見られない項目を「独自項目」とした。

このような独自項目は一切経音義全二十五巻のほとんどに見られる。各巻の独自項目を統計したものを表1に示す。

表1 一切経音義の各巻別独自項目数

巻	項目 数	巻	項目 数	巻	項目 数	巻	項目 数	巻	項目 数
一	399	六	12	十一	1	十六	1	二十一	2
二	2	七	1	十二	7	十七	4	二十二	61
三	17	八	0	十三	0	十八	26	二十三	2
四	1	九	1	十四	0	十九	2	二十四	1
五	18	十	1	十五	71	二十	2	二十五	1

一切経音義各巻の独自項目数は表1のようになる。一つの項目が、ある巻に対して独自項目であるが、一切経音義の他の巻に見られる例が多数ある。例えば、「棚閣」という項目は巻四、五、八、十三、十四にある。それらのうち、巻五のものは三つの系統の中で、高麗本系統にしか見られないものであることから、「独自項目」と言える。

#### 4.2 独自項目の独自注文

4.1では、独自項目について説明した。次に、これらの独自項目に見られる注文が他の巻に見られるかどうかを確認する。つまり、本論では、独自項目にしか見られない注文を「独自注文」とした。以下に、一例を挙げて説明する。

##### 例1

一切経音義

<辯（帯）>（巻第十五・十誦律 高麗本のみ）

父殄反。『説文』：交辯也。『通俗文』：織繩曰辯。辯、織也。

<辯（髪）>（巻第十四 諸本あり）

『三蒼』亦編字、同。平典反。『説文』：辮、交織也。

<辮（髮）>（卷第十八 諸本あり）

『三蒼』亦編字、同。蒲典反。『説文』：辮、交織也。

一切経音義卷十五には、「辮帶」の項目が高麗本系統のみに見られ、他本には見られない。先述のように、「辮帶」を独自項目としたうえで、その独自項目の注文を他の巻と照合してみたところ、傍線部の内容が他の巻にないため、「独自注文」とした。

一方、独自項目において、その注文が他本にも見られる例も少なくない。このことに関しては、以下具体例を挙げて説明する。

例 2

<肪𦛑>（卷第五・移識経、高麗本系統のみ）

府房反、下先安反。『通俗文』：在腰曰肪、在胃曰𦛑。『廣雅』：𦛑、脂肪也。

<肪𦛑>（卷第九 諸本あり）

先安反。『廣雅』：𦛑、脂肪也。『通俗文』：在腰曰肪、在胃曰𦛑也。

<肪𦛑>（卷第三 諸本あり）

府房反、下先安反。『廣雅』：肪𦛑、脂也。『通俗文』：在腰曰肪、在胃曰𦛑。

<肪𦛑>（卷第十九 諸本あり）

府房反、下桑安反。『説文』：肪、肥也。『廣雅』：脂、肪也。

例 2 の「肪𦛑」という項目は、巻第五では、高麗本系統に存するが、他本には見られない。しかしながら、「肪𦛑」が一切経音義の他の巻に三例あり、さらに、巻五の注文が他の巻にも見られる。この例のように、一切経音義には独自項目であっても、注文の内容において諸本ともほぼ



一致する内容が多くあるので、本論文では、これらの項目を研究対象外とする。本論では、独自注文がある独自項目のみを研究対象として検討する。

「一切経音義全文データベース」を利用し、すべての独自項目を抽出した後に、これらの独自項目に独自注文があるかどうかを確認する。その上で、独自注文もある独自項目をまとめ、表2のように示す。

表2 一切経音義の各巻別独自注文がある独自項目数

巻	項目数	巻	項目数	巻	項目数	巻	項目数	巻	項目数
一	332	六	12	十一	0	十六	1	二十一	2
二	1	七	1	十二	5	十七	2	二十二	39
三	9	八	0	十三	0	十八	12	二十三	1
四	0	九	0	十四	0	十九	1	二十四	1
五	7	十	0	十五	23	二十	2	二十五	0

本論では、それらの内容を新撰字鏡と比較し、新撰字鏡の依拠本を推測することを目的とする。以下では、これらの内容について分析する。

## 5 新撰字鏡との照合

### 例3

新撰字鏡

<辮>：薄顯反。上：編髮也、交辮也、織繩曰辮。織也。（新211-61）

一切経音義

<辮帶>（巻第十五・十誦律 高麗本のみ）

父殄反。『説文』：交辮也。『通俗文』：織繩曰辮。辮、織也。

例3では「一辯」についての項目が一切経音義に多数ある。しかしながら、傍線部の「織繩曰辯。織也。」は巻第十五のみに見られることに注目したい。さらに、玉篇系辞書と比較すると、これらの内容が存しないため、この部分は一切経音義巻第十五からの引用であると推測される。

例4

新撰字鏡

＜策＞：二同作、古文作𠄎、冊同。初革反。謀也、討也、籌也、打也、馬槌也。阿布留、又夫知。（新474-64）

一切経音義

＜策謀＞（巻第十五・僧祇律 高麗本のみ）

古文𠄎、冊、筭三形、同。初革反。策亦謀也。下莫侯反。謀、論也。諮事爲謀、謂諮事之難易也。

＜乘策＞（巻第十七 諸本あり）

古文冊、筭、𠄎三形、同。楚革反。策、馬槌也。所以捶馬驅馳也。

「策」の義注については、「謀也、討也、籌也」と「打也、馬槌也。」の二つの部分に分けて分析する。篆隸万象名義では、「楚革反。馬槌也、詩(謀)也。」、広韻では「謀也。籌也。『釋名』曰：策書教令於上、所以驅策諸下也。又馬槌也。楚革切。」である。即ち、「策」の義注については、巻第十五と巻第十七が「謀也」と「馬槌也」の二つの意義を示している。この中で、新撰字鏡と一切経音義を対照すると、字体注と反切が一致する。

例 5

新撰字鏡

<吃>：居乙反。入：言難也、重言也。己止毛、又万々奈支。（新110-31）

一切経音義

<吃人>（卷第十五・五分律 高麗本のみ）

九乙反。『説文』：言難也。重言也。

篆隸万象名義：<吃>居乙反。語難也、重言。

広韻：<吃>居乙。語難。『漢書』曰：司馬相如吃而善著書也。

宋本玉篇：<吃>居一切。語難也。

例 5 では、新撰字鏡傍線部の注文が一切経音義と一致し、また篆隸万象名義と一部分が一致する。

例 6

新撰字鏡

<莖>：千臥反。去：謂斬莖卧馬者也、秣也、莖也。（新420-22）

一切経音義

<莖草>（卷第十五・五分律 高麗本のみ）

千臥反。謂斬莖卧馬者也。『詩』云：乘馬在廄、莖之秣之。『傳』曰：莖、莖也。

例 6 では、新撰字鏡の傍線部が一切経音義のものと一致する。これらの内容は、一切経音義巻第十五以外には見られない。さらに、注文の配列順も一致するため、新撰字鏡がこの項目において、一切経音義巻第十五を利用したと推測できる。

例 7

新撰字鏡

＜殆＞：徒改反。上：始也、敗也、近也、幾也、化也。（新649-32）

一切経音義

＜殆壊＞（卷第十五・僧祇律 高麗本のみ）

徒改反。『廣雅』：殆、敗也。『爾雅』：殆、危也。殆亦幾也、近也。

篆隸万象名義：達改反。近也、始也、危也、幾也、敗也。

例7「殆」では、義注が篆隸万象名義とほぼ一致するが、反切が一切経音義と一致する。また、一切経音義の義注と同じ部分が見られ、一切経音義から引用した可能性がある。

6 独自項目以外の内容

第5節では、独自注文のある独自項目について新撰字鏡と比較した。しかし、その比較対象は量的に決して多くない。そこで、調査対象を拡大する。以上の5例はいずれも巻第十五の内容であるため、本節では、巻第十五の独自注文に着目し、新撰字鏡と比較する。（一切経音義巻第十五が高麗本・大治本・東京大学本が現存する。）

例 8

＜鍤＞四(囚)絹反。謂以繩規物者也、圓鍤也。（新367-14）

＜鍤師＞

高麗本：囚絹反。謂以繩規物者也。『説文』：圓鍤也。

大治本・東大本：囚絹反。謂以繩規物者也。『説文』：鍤也。

例 9

<晃>

二字同作、古文亦作熿・煌同。胡廣反。明也、暉也、光也、光明也、曜也、照也。𠄎光昔（IDS 表記）同字。（新 25-52）

<晃煜>

高麗本：又作晄、古文熿、同。胡廣反。『説文』：晃、明也。『廣雅』：晃、暉也。光也。下由掬反。『説文』：煜、曜也。『廣雅』：煜、熾也。『埤蒼』：煜、盛兒也。

大治本・東大本：又作晄、古文熿、同。胡廣反。『説文』：晃、明也。光也。下由掬反。『説文』：煜、曜也。熾也。盛兒也。

例 10

<堊>二同。上：於故反。下：烏各反。白土也、塗也。（新 300-62）

<堊灑>

高麗本：於仁反、下所解反。字應作惡、於故反。即莊飾也。

大治本・東大本：於仁反、下所解反。

例 11

<虜>：二形作。力古反。獲取也、服也、掠奪取物也。（新 677-31）（貞茹によると出所不詳）

<或虜>

高麗本：力古反。虜、獲取也、服也。戰而俘獲也。虜、掠奪取物也。

大治本・東大本：力古反。虜、獲取也、服也。戰而俘獲也。

以上の例では、いずれも傍線部の注文が高麗本と新撰字鏡にあり、一切経音義他本には存しない。このことから、新撰字鏡編纂時に、利用さ

れた一切経音義は、高麗本に近いものであったと考えられる。

## 7 おわりに

以上のことから、一切経音義の中のある系統、或いは、ある写本にあり、他本にはない独自項目を抽出し、新撰字鏡と比較した。それらはいずれも高麗本にあり、他本にない項目である。これらの内容により、新撰字鏡の依拠本を推測すると、次のようにまとめられる。

1 新撰字鏡が利用した一切経音義は大治本であり、後代に節略された

上田（1981）では、大治本一切経音義諸本には脱落があることを指摘されている。新撰字鏡の編纂時に利用されたのは、大治本系統の一切経音義であることを前提にすると、現存する大治本が節略本であることが明らかになる。次の例 12 を挙げる。

### 例 12

<勗勉>（巻第十五・五分律）

高麗本：許玉反。『方言』：齊魯謂勗曰勗滋。『尚書』：勗哉夫子。孔安國曰：勗、勗勵也。謂勸強也。

大治本・東大本：許玉反。勗、勗勵也。謂勸強也。

例 12 において、高麗本の注文には出典が明記され、さらに、出典からの引用も見られる。それに対して、大治本と七寺本は、引用が全部節略され、反切と義注のみが残されている。これまで、一切経音義高麗本は、増訂本であることがほぼ定説であった。しかしながら、最初の段階の一切経音義が現存する高麗本に近く、大治本・東大本が後代の節略本である可能性がないとは言えないことがわかった。

もし、新撰字鏡が利用したのが同じく法隆寺で書写された大治本系統

の写本であれば、新撰字鏡が編纂された昌泰年間に参照された一切経音義は、高麗本に近い状態であったと考えられる。新撰字鏡が編纂された昌泰年間以降、大治三年に書写されるまでの間に、省略が行われたと推測される。

## 2 新撰字鏡が利用した一切経音義は伝承されていない

### 【地理的に】

図書寮本が利用した大治本系統の一切経音義では、大治本（法隆寺蔵本）と金剛寺蔵本（1236-1237年書写）の巻末に新華嚴経音義が見られるが、他本には見られない。また、新華嚴経音義は、万葉仮名の和訓があることから、日本で編纂されたと考えられる。新華嚴経を拠り所とした華嚴宗は、宗派の思想が反映されている東大寺盧舎那仏像を建立したことから、一切経音義巻第一巻末の新華嚴経音義が東大寺で編纂され、その後東大寺から法隆寺に流出した可能性がある。これは、東大寺（奈良）と法相宗の法隆寺（奈良）が地理的に近距離であるため、文献の交流と伝播が容易であったと考えられる。そのため、その後新華嚴経音義が、華嚴宗の東大寺から法相宗の法隆寺や、真言宗の金剛寺（天野山、現大阪府河内長野市）までに広がったことが想像できる。

また、本論では、9例の項目を検討した上で、新撰字鏡の成立時に利用した一切経音義は高麗本系統に近いと考え、華嚴宗、法相宗、真言宗の間で流通する一切経音義と別系統であると主張する。この系統の一切経音義は現在、高麗本を除き、取合わせ本である七寺蔵本（1177年）に一部分しか残っていない。また、七寺は愛知県名古屋市にあり、奈良仏教の寺院からかなり距離があることから、当時新撰字鏡が利用した一切経音義が日本に七寺本の一部分しか残っていないと推測する。また、その一切経音義は、奈良の仏教集団の間で広く使われていたものとは異なるものである。

### 【内容的に】

一方、本論では、一切経音義巻第十五の高麗本系統の独自項目と独自注文が新撰字鏡に多数引用されたことを明らかにした。一切経音義巻第十五は、十誦律・僧祇律・五分律からなり、いずれも律宗に関する内容である。これにより、新撰字鏡が利用した一切経音義は、律宗集団の僧侶により増訂された可能性がある。大胆に推測すれば、新撰字鏡が律宗集団の間で流通した高麗本系統に近い一切経音義を利用しているが、その系統の一切経音義は、日本では伝承されなかった。そのため、新撰字鏡の成立は律宗集団と深く関わることが考えられる。

### 【後代への影響】

西崎（1982）では、以下のように述べられている。新撰字鏡は「改編本系『名義抄』や世尊寺本『字鏡』などには、明らかに影響がある。」しかしながら、「原撰本『名義抄』では『新撰字鏡』を利用した形跡はない。」

その原因については、「出典を明示する原撰本『名義抄』の潔癖な態度と、新撰字鏡の所拠不明な記述態度とはそりが合わなかったであろうことは容易に想像がつく」と論じられている。その他、原撰本『名義抄』は法相宗系の僧侶によって編纂された。新撰字鏡の著者が法相宗以外の宗派集団の僧侶であれば、意識的に原撰本『名義抄』の利用を避けた可能性も否定できない。

### 3 望月説について

望月（1999）では、古辞書の成立原因について「宗学研究よりも、その文献の成立を優先しなければならない特殊事情——寺院の宗学の大変革とか、災害などによる大寺院存亡の危機とかに直面し、宗学存亡に対して学侶が相当の危機感を抱き、宗学研究よりも、宗学のレーゾンデートルを寺院内外に訴えなければならないとなった時ではなかったかとし



た。」と論じた。このことから、「新撰字鏡の成立時期をやや遡る時期に、宗学の危機に陥った寺院を探してみる。国史大辞典によって、南都の大寺院を調べた限りでは、候補として注目すべきは西大寺である。」と述べている。それは、「西大寺が承和十三年（846）には講堂、貞観二年（860）には主要な堂舎が焼失し、創建当初の面影を失い衰微した」からである。

望月氏によると、西大寺が焼失された後、「宗学のレーゾンデートル」を示し、新撰字鏡が編纂された。その論に従うと、新撰字鏡が編纂時に利用した一切経音義が、他の寺院から将来したもの、あるいは、西大寺の火事で偶然に無事に残ったものであったということになる。しかしながら、西大寺の火災では、講堂及び堂舎が焼失され、一切経音義のみ無事に残された可能性は極めて低い。よって、一つの可能性として考えられることは、西大寺の火災の後、どこからか将来した一切経音義を利用して新撰字鏡を編纂したということである。一切経音義の将来については、西大寺（真言律宗）と同じ宗派集団の寺院か、地理的に近距離にある寺院の可能性が高い。

今後の課題としては、一切経音義の独自項目にとどまらず、諸本間のすべてに、異同のある注文との対照も行う必要がある。一切経音義各系統の独自注文と比較した上で、新撰字鏡が編纂時に利用した一切経音義の依拠本を解明する。

一方、新撰字鏡が依拠した一切経音義を解明した後、その結果に基づき、現存する一切経音義の増訂本と節略本の定説を覆す可能性もあると考えられる。

## 参考文献

池田証壽（1980）「上代仏典音義と玄応一切経音義：大治本新華嚴経音義と信行大般若経音義の場合」、『国語国文研究』（64）、北海道

大学国語国文学会

池田証壽（1982）「玄応音義と新撰字鏡」、『国語学』第 130 集、国語学会

池田証壽（1984）「新撰字鏡玄応音義引用部分の字順について」、『国語国文研究』（71）、北海道大学国語国文学会

上田正（1981）「玄応音義諸本論考」『東洋学報』第 63 巻第 1・2 号

貞苺伊徳（1959）「新撰字鏡の解剖〔要旨〕—その出典を尋ねて—」、『訓点語と訓点資料』12

貞苺伊徳（1960）「新撰字鏡の解剖〔要旨〕付表（上）」、『訓点語と訓点資料』14

貞苺伊徳（1961）「新撰字鏡の解剖〔要旨〕付表（下）」、『訓点語と訓点資料』15

貞苺伊徳（1998）『新撰字鏡の研究』、汲古書院

西崎亨（1982）『日本古辞書を学ぶ人のために』、世界思想社

望月郁子（1999）『仏教界に辞書は在ったか—古字書の新研究』、笠間書院

箕浦尚美（2006）「金剛寺本・七寺本・東京大学資料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』について」『日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』国際佛教學大学院大學學術フロンティア実行委員会

李乃琦（2017）「図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切経音義』の利用」日本語学会口頭発表、2017 年 5 月 13 日、関西大学

## 使用テキスト

1 高麗蔵経本（『高麗大蔵経』、東国大学校、1976 年。『高麗大蔵経初刻本輯刊』、西南師範大学出版社、人民出版社、2012 年）

- 2 大治三年本、広島大学蔵本、天理図書館本（『古辞書音義集成「一切経音義」』、汲古書院、1981年）
- 3 大阪金剛寺蔵本、名古屋七寺蔵本、西方寺蔵本、京都大学蔵本、東京大学蔵本（『日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』、国際佛教學大学院大學學術フロンティア實行委員會編集發行、2006年）
- 4 天治本新撰字鏡（『新撰字鏡天治本』京都大学文学部国語学国文学研究室、臨川書店、1976年）
- 5 篆隸万象名義（『高山寺古辞書資料第一』（高山寺資料叢書六）、高山寺典籍文書総合調査団編、東京大学出版会、1977年）
- 6 広韻（『校正宋本廣韻附索引』、藝文印書館、2002年）
- 7 宋本玉篇（『大廣益會玉篇』（古代字書輯刊）、中華書局、2008年（初版1987年））

#### 付記

この論文は中国国家社科基金項目 20CYY024 による研究成果の一部である。

#### <キーワード>

一切経音義、玄応、古写本、新撰字鏡、昌住、天治本

## Summary

### The Text to Make the Catalog of *Shinsen-jikyō* Seen from the Original Content of *Yiqiejingyinyi*

LI Naiqi

*Shinsen-jikyō* is a dictionary compiled by Shōjū, a monk from the Heian period. It is the oldest existing Chinese-Japanese dictionary. The preface of *Shinsen-jikyō* clearly states the purpose of compilation, which aims to improve the convenience of using *Yiqiejingyinyi*. *Yiqiejingyinyi* is written in the order of Buddhist sutras. It was inconvenient for anyone other than a monk who was familiar with Buddhist monks to use it. Therefore, Shōjū has reorganized *Yiqiejingyinyi* into a dictionary in the order of radicals.

*Yiqiejingyinyi* can be divided into several types. What kind of *Yiqiejingyinyi* did Syoujyu use when compiling *Shinsen-jikyō*?

*Shinsen-jikyō* has a seal of "Hōryū-ji Issaikyō". The *Yiqiejingyinyi* of the Daiji manuscript was copied at Horyuji Temple in 1128. From this, it is quite possible that *Shinsen-jikyō* used the *Yiqiejingyinyi* of Daiji manuscript. The author did not find it in the *Yiqiejingyinyi* of Daiji manuscript but discovered the contents in *Shinsen-jikyō* and other *Yiqiejingyinyi* manuscripts. In this paper, we examine various possibilities in order to clarify the factors that caused the contents.

*Associate Professor,  
Zhejiang University  
Commissioned Research Fellow,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*